

人生 「タロ」と「ジロ」に救われた青春

昭和三十四年一月十五日、私にも「成人の日」が来ていた。若者たちの久しぶりの邂逅は会場を賑やかにしていたが、お祝い言葉が始まると、会場は厳粛な雰囲気かいこうに包まれていった。当時の二十歳はそれぞれに大人としての自覚を目覚めさせていた。このとき式の途中で、歴史的なニュースが報じられたのである。司会者が「嬉しいニューなので、お伝えいたします。第一次南極観測隊が南極に置いてきたカラフト犬のうち、タロとジロの二頭が生きていたことが判明したそうです・・・」

この割り込み放送は、会場の全員を総立ちにさせ、歓声と拍手は暫く止まなかった。勿論、私もその感動の渦の中に居たのだが、実はこの時、私は報道の喜びとはまったく異質な、一つの心配ごとを抱えていた。母の病であった。余命半年と医師に告げられていた母の病は、入院七カ月目に入っていたのである。この成人式への出席も病院からであった。成人証書を手にしたら、急いで病室へ戻らなければならない。当時の病院は完全看護ではなく、家族の誰かが付き添っていないければならなかったのである。

畳二枚の病室は、母が苦しみ呻吟しんぎんしているベッドの他に自分自身が寝る空域しかない。二十歳の青年が過ごすにはあまりにも狭く、私に与えられた僅かな自由は絶望感の心の浮遊と寂寥の沈黙しかなかった。母は私の成人式を見届けるように、それから一カ月後に他界した。後には、むなしいやり残した無力感と孤独感だけが残った。

私は母の看病のため高校を一年前に中退していたので、母を喪った悲しみに加え目標を見失い、私より深い哀しみを背負ったであろう父に反抗し、自暴自棄的になっていった。心はもぬけの殻のようになり「道」を見失い、一步間違えば奈落の底のような生活をしていたのである。母という重要な存在を失い一家は離散し、気が付いてみると、自分の周りには無目的で、生活力のない若者が沢山集まっていた。

成人式から無為な一年が過ぎようとしていた。あの時の同級生はみな凛々りりしく立派に見えた。自分は運命を呪い人生に唾を吐いて歩いた。名犬でもない駄犬が、世間から打たれ続ける負け犬になり下がったのだ。いや、犬以下かも知れない。犬！・・・そうだ、あの成人式の日、タロとジロのニュースがあったなあ、あの感動は忘れられない。感激だったなあと思い出した時、突然、不思議な心持ち

になった。あの二頭は南極で極寒の中を生き抜いたのだ。私の人生の先はまったく見えないが、方向を見失ったら一度原点に戻るべきではないのだろうか。あの二頭は食べ物がなく痩せたために首輪を抜け出すことができ、南極基地という原点があったために厳寒を凌ぐことが出来たのではないか。

私は定時制高校四年への編入を決意した。二十二歳を目の前にした春であった。タロとジロが極寒の中で生き抜いた峻巖しゅんげんに比べたら、小さな恥辱や他人の目とか外聞はあっさり削ぎ落とすことができた。このときの強みは、最早失うものは何一つ無いという開き直りだったのかも知れない。しかも、末っ子の私が母を看取みとったということ、宿命的に最も早く別れなければならない母と子に、少しでも長く時間を与えようとした天の配剤だったのだとも思えるようにもなった。

しかし、一家離散は想像以上に厳しいものがあった。わが家の飼い犬に「エス」という犬がいた。雑種ではあったが忠犬であった。すでに上京してしまっていた父が食事の残りを与えていたのだが、その人がいなくなってしまうのである。私はそのエスと共に兄の家を転がり込んだ。私は昼の仕事、夜は夜学とエスと顔を合わせる

ことが少なくなつた。ある日、兄嫁の話によるとエスが絶食して
るといのである。驚いて母屋から少し離れた松の木に繋がれたエ
スに逢いにいくとエスは痩せ細ってあばら骨が浮いていた。かろう
じて振る尾にも力はなかつた。エスは翌日に他界した。動物は自分
の死を飼い主に見せないところで死ぬと云われているが、南極基地
に繋がれたまま死を迎えた多数のカラフト犬同様、絆とは全く反対
に隔離という鎖に繋がれたまま、知らない場所で逝つたのである。
鎖に繋がれての生は地獄だつたに違いない。私にはひとつ未だに謎
が残る。エスの死はエス自身が決意した意思によるものなのか、環
境の変化による精神的なものだったのかという疑問である。エスは
生涯貧しい飼い主の下で、功名を称えられることもなく、飼い主に
尾を振ることを仕事とし、一片の肉をも口にすることなくこの世を
去つたのである。

人間は切羽詰まつたとき、気の弱い御仁の中には苦からの逃避を
考える人もいるかも知れない。しかし、勇氣はあらゆるところから
戴ける。「エスの死」も私にとっては無駄にはならない大きな出来事
であつた。私の上京後の生活は、これらの見聞と経験のすべてが役
に立ち、多くの人々の支えはあつたものの、希望どおり願ひは叶つ

た。二十七歳で初めて公立高校の教壇に立った新前教員は、教育を自分の天職にまで高めようと、過去に出会ったあらゆるものに誓った。

もし、成人式に出席せず、タロとジロのニュースを聞かなかつたしたら、その後の私の人生は、全く変わったものになっていたに違いない。タロとジロが私に人生の転機を与えてくれ、無言のエスの死が、母との別れ同様に生命の重さを教えてくれたことは間違いない。私にとって、タロとジロとエスは単なる犬ではない。

五十年以上も前の話である。